

優秀賞

「生きる」ということ

青森県八戸市立下長中学校

三年 速 応 唯 花

気が付いたら私は病院のロビーで泣きながらおにぎり食べていた…。

中二の夏。私は腎臓の病気を患って、痛くもかゆくもないのに、心はこんなに元氣なのに、主治医に緊急入院を告げられた。小児科の病棟から一階のロビーまで歩いた記憶がない。「私は病氣なの？ 入院するの？ うそでしょ？」頭の中の混乱が止まらない。合唱コンクール、体育祭、吹奏楽コンクール、夏祭り、文化祭、数々のイベントに参加することができない自分が嫌で嫌でどうしようもなかった。友達にも会えない。家族とも離れる。母から渡されたおにぎりを無言で泣きながら食べた。

入院してから一週間が過ぎた。私は、個室から四人部屋へ移動した。小さな子供たちに囲まれて「にぎやかで楽しそうだな。」というのはうそ。中学生の私はカーテンを閉め、外の世界を遮断した。私は二日間泣いた。三日目くらいだろうか、向かいの小さな男の子のお母さんと思われる方がお菓子をくれた。私は笑顔で受け取った。「私、笑顔になれるじゃん。」そう思った。なんか、笑顔っていいな。元氣になるな。徐々に外の世界が恋しくなった。カーテンを開けると、小さな男の子がキラキラとした瞳で

私を見ている。

「お姉ちゃん遊ぼう。」

おもしろそうな遊び相手が見つかったかのように、無邪気な笑顔で私の方に近づいてくる。その男の子の名前は翔太郎くん。四歳。この子との出会いが、今まで小さな世界の中に閉じこもっていた私の価値観をがらりと変えてくれた。生きるということの本当の意味を教えてくれたのだ。

呼び名は「翔ちゃん」。生まれた時から肺の病気を患っていて、入院を何度も繰り返しているそうだ。外でたくさん遊びたいはずなのに、誰よりも元氣で笑顔。私のことを「お姉ちゃん」と呼んでピタッとくっついてくる。周りには私が遊んであげているように見えているかもしれないが、それは違う。私の方が翔ちゃんのおかげで笑顔にさせてもらっている。入院生活も楽しくさせてもらっている。翔ちゃんは、みんなを笑顔にする天才だ。扇子を持って踊ることが大好きで、よく、

「お姉ちゃんもやって。」

とせがまれ、恥ずかしいのに一緒に踊らされた。夜、消灯の時間がせまるころ、私のベッドの上で病院ごっこもさせられた。注射をしたときには、

「ちゃんと泣いて。」

いつも怒られた。

そんな毎日を過ごしている中、私は仙台の病院に転院することになった。離れていても翔ちゃんのこととがずっと頭から離れなかった。そのあとも治療を頑張ることができたのは翔ちゃんのおかげだ。そして私は、晴れて退院することができた。

まっ先に翔ちゃんに会いに行った。少しやせた私の不安をよそに翔ちゃんはいつもと変わらぬ様子でむかえてくれた。そして、病室で遊んだ時のように楽しい時間を過ごした。

「またね、バイバイ。」

まだ入院している翔ちゃんを残し、やっと普通の生活に戻ることができた。私は、入院していた頃のことを忘れたかのように、入院していた時間を取り戻すように、日々を精いっぱい過ごした。毎日が楽しみだった。幸せだった。そんな何気ない幸せをかみしめていた時、信じがたい出来事が起こった。春の陽気がまぶしくなってきたある日、翔ちゃんは天国へ行ってしまった。毎日私を笑顔にしてくれた翔ちゃんもういない…。私は今まで感じたことのない喪失感に襲われた。「なんで？ どうして？ うそでしょ？ 神様は本当にいるの？ 翔ちゃんは幸せだったの？」

私は翔ちゃんという一人の男の子に出会えたことを忘れない。かけがえのない財産だ。みんなを笑顔にしてくれる小さな「天使」翔ちゃんはきつと天の使いだったのだ。私はこの先、どんな困難にぶつかっても乗り越えられる自信がある。いや、命ある限り乗り越えなければならぬ。「生きている。」それだけで幸せなのだ。私は翔ちゃんに恥ずかしくないような人生を歩むことを誓う。

翔ちゃん、出会ってくれてありがとう。私も翔ちゃんのように周りを幸せにできる人間にきつとなる。

作文を書くに当たって

中2の夏。私は一人の男の子との出会いで人生感が変わりました。この作品はまだ4歳だったその男の子に宛てた私からの最初で最後のラブレターです。皆さまの心のどこかに彼が生きてくれますように。「生きる」ということの意味を感じていただけますように。このような機会を与えてくださった東北電力様、森外先生に感謝です。